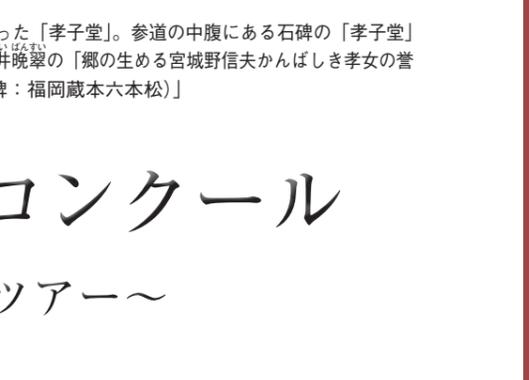
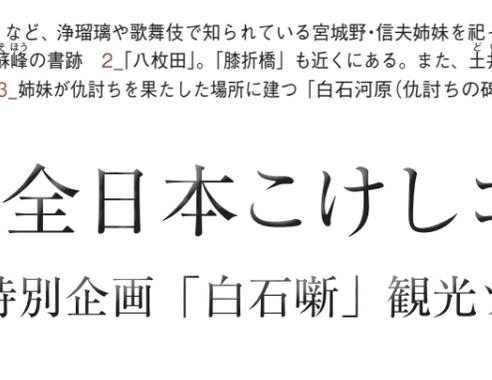
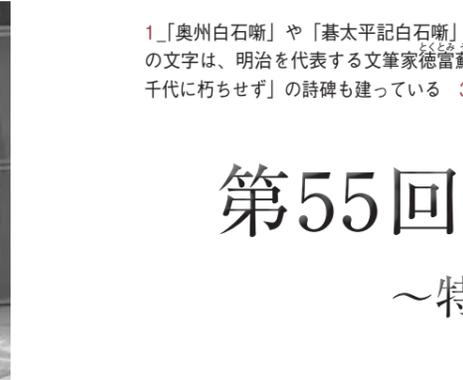




1\_「奥州白石噺」や「碁太平記白石噺」など、浄瑠璃や歌舞伎で知られている宮城野・信夫姉妹を祀った「孝子堂」。参道の中腹にある石碑の「孝子堂」の文字は、明治を代表する文筆家徳富蘇峰の書跡 2\_「八枚田」。「膝折橋」も近くにある。また、土井晩翠の「郷の生める宮城野信夫かんばしき孝女の誉千代に朽ちせず」の詩碑も建っている 3\_姉妹が仇討ちを果たした場所に建つ「白石河原(仇討ちの碑：福岡蔵本六本松)」

# 第55回全日本こけしコンクール

～特別企画「白石噺」観光ツアー～



7・8\_大鷹沢小「団七踊り」。3年生は、専念寺を訪問し、宮城野・信夫を調べ、孝子堂などを見学。4年生は、6年生から踊りの指導を受け、「団七踊り引継式」で初めて踊りを披露。5・6年生は学習発表会で、保護者と地域の方々に伝統の踊りを披露している 9・10\_「白石市民謡民舞保存研究会」の演舞 11\_講師の神田織音さんの講談 12\_白石に足を運び「姉妹白石仇討記」を描いた山口さん 13\_日本杖道会仙台支部の演武

4\_ツアーの案内役を務めた「専念寺」の徳力祐弘副住職 5\_専念寺所蔵の「仇討綿絵」 6\_浄土真宗 本願寺派「高徳山専念寺」。片倉家御家中の寺で、今に400年の歴史を刻む。専念寺開基の道願和尚は、初代片倉小十郎景綱に仕え、片倉公出陣に際して戦場まで付き従ったといわれ、片倉公によって白石城の真東に建立された。宮城野・信夫(佐藤まち・その)は、道願和尚に従った寺侍・佐藤家につながる

## 「白石噺」とは？

寛永13(1636)年の夏、ある日のことである。奥州伊達家の重臣片倉小十郎の御領内、逆戸村、現在の大鷹沢の「八枚田」にて、父佐藤与太郎、娘まち、その妹そのの親子3人が、田の草取りをしていたところに、片倉家剣術指南役志賀団七が通りかかり、折り悪く娘の投げた草の泥が団七にかかったのである。おそれ多いことと、父与太郎はひれ伏して何度も何度も謝ったが、勘弁ならぬと父を手打ちにした。娘2人は命からがら逃げ帰ったが、病弱だった母は力を落とし、他界してしまった。姉妹は両親の葬儀を何とか済ませ、江戸へと旅だった。

江戸で姉妹は当代一といわれた由井正雪の道場へ。由井正雪は姉妹の身の上を聞き感心し、姉を宮城野、妹は信夫と名付け、表向きは女中見習いということながら、朝に晩に、姉に鎖鎌、妹には長刀を修めさせた。

5年の修行を積み、いよいよ時来たりて、姉妹は正雪から片倉公への書状を携え、兄弟子3人とともに白石へ戻り、片倉小十郎公のもとへ仇討ちを願ひ出た。

幕府から仇討ちの許しを得た、宮城野と信夫は、白石川六本松河原で志賀団七と切り結ぶ。腕に覚えのある団七なれば容易にはいかぬところ、姉妹で力を合わせ、やがて何とか切りつけて、団七の首を切り落とす。

時に寛永17(1640)年、天晴れ思いを遂げた。しかし、父の無念は晴らせども、亡父母の帰るはずもなく、また団七を討ったとして決してうれしからず。今は、両親として不幸な出会いの御家臣の菩提を弔うべくと、姉妹は髪を下ろし出家して白石を離れ、やがて鎌倉の尼寺に至りしという。

### 白石の魅力さらにPR！ 「白石噺観光ツアー」

5月5日、「第55回全日本こけしコンクール」の開催を記念し、さらに白石の魅力観光客にPRしようと、「白石噺観光ツアー」を市が開催した。ツアーには市内外から約20人が参加。この日は、与太郎と娘2人が草取りをしていた田んぼ「八枚田」や、与太郎が膝を折って

謝ったことから名付けられた「膝折橋」、宮城野、信夫を祀るために建てられた「孝子堂」、姉妹が仇討ちを果たした「白石河原(仇討ちの碑)」、「白石噺」に縁が深く、仇討ちに関する資料を所蔵する「専念寺」を、専念寺の徳力祐弘副住職などが案内した。参加者は、徳力副住職から、「白石噺」ゆかりの地や、ゆかりの品の説明を受け、熱心に耳を傾けていた。

### 「白石噺フェスタ」 「白石噺」に思いを馳せる

この日は、ツアーの後、「奥州白石噺フェスタ」がホワイトキユーブで開催された。フェスタには、ツアー参加者を含め300人を超える人たちが会場を埋め尽くした。

フェスタは、昭和60年から地域の伝統芸能である「団七踊り」を代々引き継いでいる大鷹沢小の5・6年生の児童の「団七踊り」で開幕。また、専念寺の徳力副住職は、専念寺と「白石噺」の縁や、歌舞伎の「白石噺」、江戸時代の仇討ちの意味などを分かりやすく説明した。

次に、昭和48年に、片倉家第15代当主・片倉信光さんの紹介で、和歌山市の「岡崎団七踊り保存会」から指導を受け、昭和60年から大鷹沢小で「団七踊り」を指導している「白石市民謡民舞保存研究会」が演舞を披露。神道夢想流を中心に剣術・鎖鎌術・十手術などの各種古流武道の研究を行っている「日本杖道会仙台支部」が、由井正雪の流れをくむ鎖と分銅を鎖で結んだ鎖鎌と太刀(木刀)で行う形武道「心流鎖鎌術」の演武を披露した。

続いて、白石に伝わる「白石女敵討」を元に講談を描いた歴史ライターで演芸作家の山口則彦さんと、平成23年に真打ちに昇進、新作から古典まで幅広い芸域を持つ講談師の神田織音さんが、講談で使用される道具、講談と落語の違いや歴史などを紹介した。

2人は、講談はもともと、軍記ものや政治の話をもとに話して聞かせる話芸で、注目を集めるため張扇と拍子木で拍子を取って耳を傾けさせ、軒下で話をしていたが、屋根がつき、風よけがつき、寄席が誕生。偉い徳川家の話を、民衆と同じ目線で話すのは申し訳ないと、台を積んで少し高い目線から読み聞かせ、民衆に語る話芸へと成長したことを話した。

そして最後に、全国に数ある仇討ち話の中でも、身分の低い女性が侍を討つ「白石女敵討」に興味を沸き、昨年白石に足を運び、この話にゆかりのある専念寺などを訪れ、山口さんが描いた「姉妹白石仇討記」を、神田さんが披露。見事仇討ちを遂げるシーンでは、涙をぬぐう人などもあった。

参加者は、「遠い過去に思いを馳せたり、歩いたり。新鮮な驚きと、うれしい発見があった。伝統を受け継ぎ、守り続けている人たちの言葉は、今も白石に確かに息づく息吹を感じた」と笑顔で話してくれた。